

認知言語学

長谷部陽一郎

認知言語学では、言語を人間の基本的認知能力および社会や対人関係を含む広い意味での外部世界とのインターアクションの観点から分析・記述する。1980年前後に生まれた認知言語学は、比較的新しい言語学上のパラダイムであるが、30年という英語で言うところの「1世代」(generation)を経て、1つの節目を迎えようとしている。海外でもまた国内においても、認知言語学を構成する様々な理論や概念をあらためて整理しなおし、理解を共有しようという試みが行われている。ここではそのような動きの中で特に象徴的と思われる出版物をいくつか紹介したい。

海外においては、構文理論の第一人者 Adele E. Goldberg が Langacker、Lakoff、Talmy、Croft など認知言語学を代表する研究者たちによる過去の重要論文をまとめた書物 *Cognitive Linguistics* (2011, Routledge) を完成させた。これは全5巻、75編の論文から成るアンソロジーで、カテゴリーのネットワーク、使用依拠モデル、意味の身体性といった認知言語学の基礎となる概念を扱った初期の論文に加え、認知言語学に基づく言語習得モデルや、大規模コーパスおよび統計手法を用いた定量的研究手法といった、近年注目を集めている新しい領域の重要論文も収められている。約30年間の研究の流れを一望できるコレクションである。

一方、国内でも今日の認知言語学の根幹を作ってきた研究を再確認しようという動きがあり、それは長らく待たれてきた海

外重要文献の翻訳書の完成として現れている。例えば、認知言語学における最も体系的な文法理論の1つ認知文法 (Cognitive Grammar) の提唱者である Ronald W. Langacker の著書 *Cognitive Grammar: A Basic Introduction* (2008, Oxford University Press) の翻訳『認知文法論序説』(2011, 山梨正明監訳, 研究社) が刊行された。Langacker の研究は日本語の表現を扱う研究者によっても度々言及されてきたが、本書の完成で、より広くその理解が共有されるものと思われる。なお、2013年には上記原書から認知文法の初学者にとって特に重要な4つのセクションのみを取り出し、600ページ近いオリジナル版の約半分の分量となるよう再構成された書籍 *Essentials of Cognitive Grammar* (Oxford University Press) が出版された。このことも Langacker による原書およびその翻訳の重要性を物語っている。

その他、Alan Cruse による *Meaning in Language* の翻訳『言語における意味』(2012, 片岡宏仁訳, 東京電機大学出版局) が出版された。これは認知言語学の観点から言語の意味に関する幅広い現象を扱った定評ある書物であり、すでに2回の改版を重ねた原書の翻訳である。従来の意味論と認知言語学に基づく新たなアプローチの関係を把握するのにきわめて有用な1冊である。

表現研究と認知言語学研究の接点は小さくない。認知言語学の分野で積み重ねられてきた知見を広く、また正確に参照することの重要性は今後増していくだろう。そのような中、上で紹介した近年の状況は頼もしい追い風になると思われる。(同志社大学)